多種多様、淡水魚たちの生態と生活史

淀川水系魚類名鑑

希少野生動植物保存推進員
横山 達也

イチモンジタナゴ

Acheilognathus cyanostigma



前回のイタセンパラと同じ、コイ目コイ科タナゴ亜科に属する日本固有の淡水魚です。琵琶湖・淀川水系、由良川水系、紀の川水系、三方湖、濃尾平野などに分布していましたが、琵琶湖産のコアユ稚魚の放流にともなって、岡山県や熊本県など西日本各地にもみられるようになりました。

全長が約8cmで、オスの方がメスより大きくなります。体型は、体高が低く、体側に青緑色の長いラインが一本あり、これが「一文字」という名前の由来です。繁殖期は春から夏で、大型のドブガイやカラスガイなどに産卵します。繁殖期のオスは、腹部が淡いピンク色に、背部は明るい緑色に色づき、背びれや尻びれが白から桜色の淡い婚姻色で、非常に美しくなります。また、メスは



青緑のラインが特徴
淀川では激減している

日本のタナゴの仲間では、かなり長い産卵管を伸長させます。湖沼や池、河川や用水路などのほとんど流れのない止水域に生息しています。食性は雑食性で、一年で成魚となり、寿命はおよそ三年です。河川改修やオオクチバス・ブルーギルなどによる捕食やタイリクバラタナゴとの競合、観賞魚用としての乱獲により各地の生息地で個体数が激減しています。環境省レッドリストで、以前は絶滅危惧IB類でしたが、全国的に生息地やその個体数が急減し、特に琵琶湖・淀川水系では激減していることから、IA類にカテゴリが変更されました。滋賀県では「指定希少野生動植物種」として条例で保護され、捕獲などは禁止されています。

under the water

花想鳥感

四季折々、水辺の生物多様性

芥川緑地資料館　主任学芸員
高田 みちよ

川辺のヤナギ

淀川の水辺には、いろんな木が茂っていますよね。その中で、とくに多く見られるのはヤナギです。「え？　ヤナギって幽霊のバックで風になびいているアレ？　淀川のは全然ちがうよ」と、思われたあなた！　さすが、よく観察されていますね。

幽霊と一緒に登場するヤナギは、中国原産のシダレヤナギです。奈良時代に渡来したといわれており、日本でもヤナギといえばシダレヤナギがイメージされるようになりましたが、もともと日本の野生のヤナギは、どれもシダレていません。国土交通省の「河川水辺の国勢調査」によると、豊里地区の2009年調査では、アカメヤナギ、ジャヤナギ、カワヤナギ、コゴメヤナギ、タチヤナギの5種類のヤナギが記録されています。ヤナギには多くの種類があり、そのどれもがニョキッと普通の木と同じように立っています。早春には毛虫のようなモコモコした花が咲き、白い綿毛をまとった種子が風で飛びます。

淀川は、天ケ瀬ダムと淀川大堰で水位調整をするようになってから、水辺があまり増水によって洗われなくなり、砂がたまって、たくさんのヤナギが生えています。しかし、ゲリラ豪雨などで増水した時には流れを邪魔するため、水辺の樹木は大きくなると河川管理者によって伐採されています。「せっかく大木になり、鳥もたくさんくるようになったのに…」と、思われるかもしれませんが、治水のためには仕方ないことですね。切られてしまう前に、淀川のヤナギ林を一度見に行かれてはいかがでしょう。





the waterside

the sky & land

水辺の虫眼鏡

川に棲む水生生物の魅力的な生態

環境省　環境カウンセラー　川島 大助

コオニヤンマ

トンボをはじめ、カゲロウ、カワゲラ、トビケラなどは幼虫期を水中、成虫期を陸上で過ごす水生昆虫です。生活史の中で成虫期はとても短く、一生のほとんどを幼虫で過ごします。水生昆虫の幼虫は川虫と呼ばれ、トンボの幼虫はヤゴと呼ばれよく知られています。今回は初夏に水中生活を終えたヤゴが陸上に這い上がり、ヤゴからトンボへ変身するコオニヤンマについて紹介させていただきます。

コオニヤンマの幼虫は体長35～40mm、体色が赤茶色～黒褐色で、触角がウチワ型、また体が薄く落ち葉のように見えます。河川の上流から下流域の流れの緩やかな淀みの落ち葉や石の下などに生息しています。タモ網などを用いて落ち葉や礫を取り上げ、その中を丁寧に探すと幼虫を見つけることができます。

羽化時期は5月下旬～9月上旬頃で、特に梅雨明けの初夏には、水際にあるヨシ等の植物、礫等で本種の羽化シーン（ヤゴからトンボへのダイナミックな変身！）を見ることができます。羽化後、成虫は飛翔しますが、抜け殻はしばらくの間、セミの抜け殻のように残ります。今の時期は他のトンボ類をはじめ、カワゲラなど多くの水生昆虫の抜け殻を発見することができるでしょう。



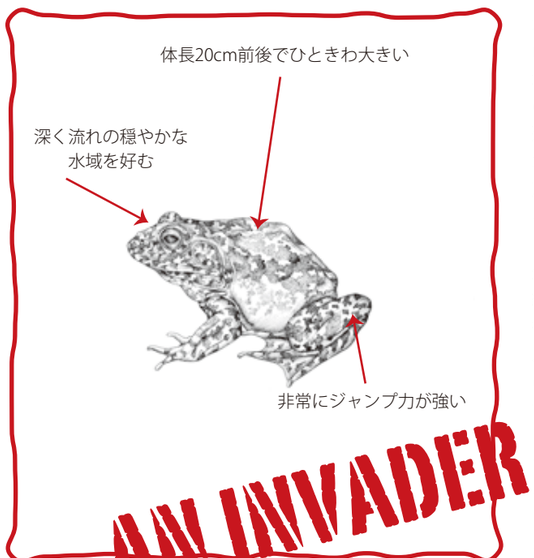
羽化したばかりのコオニヤンマ



枯れ葉のように見えるヤゴ

the worst 100

侵略的外来生物 淀川ワースト100



カエル目アカガエル科
ウシガエル：*Rana catesbeiana*



淀川管内河川レンジャー　石山 郁慧

かつては一番大きなカエルと言えばトノサマガエルでしたが、今は北米産のウシガエルであり、淀川のいたるところで見られます。繁殖期は長く5～9月。夜になるとオスは「ンブォー」と大きな鳴き声を立てます。動くもので口に入るサイズなら、何でも食べるという食いしん坊。さまざまな在来の生物を捕食しています。ある川で継続的にオオクチバスの駆除を行っていますが、一時期ウシガエルのオタマジャクシが増大。メスは6000個以上の卵を産むそうですが、どうやらオオクチバスがウシガエルのオタマジャクシを食べていたようです。どちらも徹底的に叩いた結果、在来種が増えてきましたが、駆除をやめると、もとに戻ってしまうのでしょう。



でっぷりとして存在感が大きい



減少しているトノサマガエル